高田馬場仇討

桃川燕玉口演
小野田翠雨速記

第一席

さて今回御依頼によりまして、辨じまするは、有名な高田馬場仇討でございます、中山安兵衛、後に堀部安兵衛と名乗る豪傑が、伯父の仇を討ちましたるイト壯快なる講談でありまする、ソモ此事件は何に起因したものかと申しまするに、爰に江戸青山百人町の松平左京太夫御家來に菅野六郎右衛門といふ方がある、劍道の達人で、御指南番を仰付けられ、一藩に人望がある、元は越後新

發田の家來であッたが、惡人に讒言をされて浪人をして、新たに左京様へお抱えになつたのであります、所が此左京様の御屋敷には、前から村上庄左衛門といふ御指南番があつたのですが、至つて奸物で、其上技術が鈍い、到底菅野の足元にも追付ない、十手の指さす所十目の見るところといふことがあるが、腕の出來るものは自然と人に知られる、恰當錐を嚢中へ處れて置くやうなもの だ、自然と錐の先きが嚢外へ出る、名人は自ら人に知られる、菅野六郎右衛門と村上庄左衛門兩名の御指南番があるのに、殿様を始め一家中の若侍まで盡く菅野の指南を受けたがるので、一

村上は意恨に思つて、或日若殿の御誕生の御祝日の節、菅野に恥辱を與へやうと

庄「何と拙者が今日の餘興として鐵の兜を斬つて御覽に入やう、菅野氏も定めし武藝者の事であれば、無論斬つてお見せになるであらう」

ワカ〳〵立上り、無作法にも床の間に飾つてあつた、兜を持來り、エイと氣合を入れて、大刀大上段に振冠り、エイ矢聲諸共斬付けた、チャリウーン、眞二つと思ひの外、刀を引くと兜が刀へ喰ひて上る、バタリ落ると刀が三日月のやうに兜へ喰付いて、ピカ〳〵

光つて居る、一同はワーイ〳〵惡口をいふ、庄左衛門は眞赤になつて面喰つて了い、ツカ〳〵と菅野の傍へ來て

庄「貴殿も一つ試を願ひたい

六「此は迷惑千萬……

庄「アイヤ當時旭の上るが如き勢ひの貴殿に於て、之れを試されぬといふ法はござらん、是非お試を願ひた

と傍を離れない、六郎右衛門據なく

六「左樣なれば仕方がない、斬れるか斬れないか其處は存せんが、兎角一つ試して見よう

立上り、羽織を脱だ、當年六十歳少し白髪は見えますが、まだ〳〵勇氣は滿面に溢れ、手拭を鉢巻となし、襷を綾取つて、大刀スラリ〻抜き、エイ氣合を入れたが早いか、眞二つに切れて、兜は左右へ落る、一同ヤンヤといふ譽言葉であります、村上庄衛門赤面をして、其儘退散して、到頭松平家を浪人して、弟と門人の四五名を連れて、己れの師匠として居る、牛込穴八幡に町道場を開いて居る中津川勇範といふものの家へ來て、事書を話して、加勢を頼みましたるに、早速承知しましたので、ソコデ菅野六郎右衛門の許へ果狀を送りまして、高田馬場で眞劍勝負といふこと

となりました、六郎右衛門は小人は相手にいたさん方が宜いとは思ひましたが、然し果狀を受けて其儘にいたしては、菅野は卑怯なり未練なり、眞劍勝負に恐れをなしたといはるゝも心苦しく、據なく承諾の旨を返答に及んだ、ソコデ村上庄左衛門兄弟中津川勇範を始め兩方の門弟等にて、合せて十四五人の人々が早朝より高田馬場へ出張して、幕を張りなどして大騒ぎをやつて居りますので、あたりは見物山の如くワイ〳〵いッて居る次第でございます、

爰に播州赤穗城主五萬三千石淺野内匠頭御家來に、堀部彌兵衛

金丸といふ御人がある、至つて律義の性質で、御奉公大事と勤めて居られたが、或時奥方と娘御のおてる殿の御兩人で雜司谷の鬼子母神へ御參詣になつた、此雜司谷の鬼子母神は、子供のないものには子供を授ける、良緣のないものには良緣を授ける、子育て緣結びの御利益があるといふので、御婦人方は大分御參詣になる、娘御のおかめ殿は頻りに合掌して

「妾に良緣を授けたまへ、御利益を以て何卒天下の英雄を授けたまへ」

と信心を籠めて、母御と連立つて歸途に就かれる、恰度高田馬場の近所まで來ると、ワッ〳〵といふ人聲、往來の騷ぎといふものは一ト通りではない

甲「ヤイ〳〵大變だ〳〵」

乙「何だ〳〵」

甲「仇討だか果合だか知らねえが十四五人の武士が幕を張たりなにかして大騷ぎだ」

と高田馬場の周圍は見物で山のやうでございます、之れを聽いた奥方と娘御のおかめ殿は、女性ながら武家に生れたもの、雄々しき氣象の方であるから、見物を押分けて前へ出て見てゐますやが

て支度も充分に整つたものと見えまして、酒宴を始めました、何うも昔は野蠻なものでありまして、武士氣質といふ美くしい行爲と、蹂暴野蠻といふ事とは、天地の相違があるが何もひよつとすると問違ひやすいので、野蠻をもつて武士の意氣地として居るものがある、冷酒を飲んで勇氣を附けるやうでは眞勇といふのではない、酒力を借りて事を致すものと見ます

庄「先生、まだ老耄は出て參りませんな

友「まだ參らん

庄「逃げましたかな

友「ウム、眞逆に管野六左衛門も武士のことであるから、徒らに逃げも致すまいが、何にしろ正午の刻と申する果し狀であつたからもう、今に參るであらう

庄「左樣、もう程なく晝でございますが、早く參れば宜しうございます

と云つて居る其内に、其頃はひ天下穩やかでございまして、果し合ひをするなどといふことは久しく聽いたことはない、所へ今日右樣な有樣でございまして、幕を張り槍雜刀等を飾り付け、刃傷をするといふことが世間に分りました、夫れゆへ高田の馬場は唯

今辯じた如く見物山の如く、中には食物店を出すもあり、全で祭禮のやうでございます

○「何うだい、敵手は十四五人、今に斬合ひが始まるだらう

▲「能く御奉行から手が入らねへな

十「斯うなッて見ると、少しや些との人が來て止めやうとしたッて止るものぢやねへ、今に敵手が來るだらう

▲「けれども此樣子を見たら大抵の者は逃げるに違へねへなど見物の者は口々に申して居ります、所へ

六「少々通して呉れ

と見物人を分けながら來る人がある

○「御老人危なうございます、此人込でございますから前へ出ると年を召て居て、愈々斬合が始まッて、ソレッと云ッて逃げやうと云ふ時に、危ないから後へ下ッてゐ在なせへ

六「イヤ御親切は辱けないが、何うか夫れへ出して呉れ

○「夫れは年寄の冷水ッてえもんだ、前へ出たいて仕方がねへ、危ないから云ふんだ、惡い氣で云ふんでねへ

六「誠に御親切に申して呉れるは辱けないが、拙者が出なければ御前方が立ッて居ても仕方がない

○「へエー前さんは全体何でございます

六「今日果し合の相手を致し刀傷を致す者は即ち拙者だ

○「へエー……ホ……熊見や、此た爺さんだとよ

▲「馬鹿ア云へ、此様なた爺さんが一人や二人來たッて何うするものか、チーた爺さん今に人數が來るからと云ッて前觸に來たんだらう、大きに御若勞でございます後に同勢が來ましたか

六「イヤ、後にも前にも拙者一人で……

▲「へエー、お前さん一人で此大勢を相手にするのかい、是れは龜不可ねへ、此様な者を見たッて仕方がねへ、先方の權幕も

權幕だ、功て八九人も來たら些たア面白からうが、此様なお爺さんぢや打捨ッといたッて死んぢまア、アゝ詰ねへものを見に來た

○「お爺さん惡いことは云はねへ、止したら宜からう

六「ハイ年寄が斯様な事を致したくはないが、武士といふものは先方から申し出られしば、大小の手前斷はることは出來ない、さア前を開て呉れ、道を通して呉れ

と、丁寧に會釋をして進み出る、樣子、立ッて居る見物は、人情で年を取ッて居るから止せば宜いに、もう七十からの爺さんで、

腰は曲ッて居る、歩行くにも漸うだと云ふに那の大勢を相手にして斬合をすれば、唯一太刀に討たれて了ふは知れたことゝ心配をして居る、六左衛門の姿を見ると

甲「來た〳〵老耄が參ッた

と、中津川友範の前に扣へて居る弟子達が聲を揚げる、其中に四五間前の所へ立出でまするとと、中津川夫れへ出で、

友「是れは〳〵、夫れへお出になッたは菅野六左衛門先生か、拙者は村上庄左衛門、同く三郎左衛門の武藝萬端を指南致したる中津川友範でござる

六「ア、左様か、御高名雷の如くに承知致す中津川先生でござるか手前は菅野六左衛門でござる、

友「扨此度は出來事とは云ひながら、勢ひ已むを得ず、今日になッて兄弟より果し狀を差出したる所、流石は御老人、直に御承諾あッて時も違ず、此所へお出になりしは、實に御立派の事に存ずる、付ては我々共何も村上兄弟の助勢を致すもの、此段念の爲め申入れて置く

六「夫れは御念の入ッたること、各々方は村上庄左衛門、同じく三郎左衛門に對して御助勢をなさる其義も承知致した、併し連

を天に任しての勝負なれば、御同様が心靜かに致たく存ずる、友「固よりのこと、御承知になる上からは、早速支度を遂げられるやう

六「委細承知致した、各々方も充分お支度とは見ゐるが、併し此上とも尋常にお立出でに與かりたい

と、云ひながら上に着て居りました羽織を夫れへ搔操捨てると、下には襷の用意もあり、懷中から取出したる鉢鐵入りの後ろ鉢卷夫れだけは菅野先生も御用意になりました、股立高く取上げたることにして、穿いてお出になッた雪駄を夫れに脱ぎ捨て、腰に帶びたる一刀の裏表の目釘を濕したる樣子、見物一同は大いに驚ろき

○「やアお爺さんが支度をした、何うだい見ねへ〳〵、今まで腰が曲ッて吹けば飛ぶやうな爺さんが彼處へ出たら腰が延びたぜ

▲「左樣だ、處が那の大勢の者を一人で敵手にするのか

○「是は唯の爺ぢやねへ、今までトボ〳〵して居た爺が、彼處へ出たらシャッキリ張て了ッたが、妙な爺があればあるものだ何か爺さんに勝して遣りたい

と、弱きを助けるは人情でございますから、見物はワイ〳〵云ッ

て居る、兎角する内に片脇に控へて居りましたる村上兄弟、一刀を引抜いて其所へ罷り出で、大音を揚げ

庄「やア〳〵菅野六左衛門、能く承まはれ、去る三月三日大勢の中に於て、我々兄弟に赤面を與へ、其遺恨遣る方なく、今日に至り中津川先生を願ひ勝負を致すの心底、十分に來り給へ

と、突然に兩方から斬ッて掛る、ニッコリ笑ッた菅野六郎左衛門六「己れの腕前の足らざるを顧りみず、却ッて斯く申する六左衛門を恨で果し狀を付け、只今此場に勝負を致すといふは、最も武士の許し難いこと、お望みに任して相手を致す、イザ、、、

と云ふ間に、片脇に控へて居たる近藤忠作、内山軍藏、松下與五右衛門等、一刀を提げたるもあり、鎗を提げたるもあり、其處へ立現はれたから見物の者は承知しない

○「やア卑怯な眞似をするな、助太刀といふものは片ッ方が敵はなくなッてから出るものだ、初めから出る助太刀があるものか

△「卑怯だ〳〵其樣な大勢で爺さん一人を相手にするな、卑怯だと、大勢が聲を掛けるが、是等の事には頓着せず、バラ〳〵と前へ進んだる近藤忠作、村上兄弟の助太刀致すと、一刀ヒラリと引拔いたり、心得たりと菅野六左衛門、近藤忠作が二太刀ばかり合

はせると思ふと、手元へ入ッてエイと一聲、六左衛門斬込んだることにて、忠作は後へ下ッたが間に合ず、眞向より斬下げられてアッと云ふと其場へ倒れた、ソレ斬られたと云ふ中に、村上兄弟再び夫れへ進みました、茲に高田の馬場へ安兵衛乗込みの一席。

第二席

此中山安兵衛といふのは、菅野の甥に當りまするもので、八丁堀に住んで居ります、此は菅野が下僕の彌平次を遣ッて書面を送りました主人に別れた彌平次は、虫が知らすか何となく、胸がドキ〳〵して居ります、兎にあれ八丁堀の安兵衛さんに手紙を渡して

高田の馬場へ往ッて見やうと存じ、早足に參りましたは、八丁堀川口町の穴藏屋金八方の隣り裏でございます、伯父さんの所から手當を貰ッて獨住居をして居ります安兵衛、滅多に家に居たことがございません、戸が閉ッて居るから彌平次はドン〳〵ドン〳〵

彌「エ、安兵衛さん、モシお不在でございますかドン〳〵ドン〳〵幾ら叩いても返事をしない、見ると締りがしてあるから

彌、何んのことだ、餘り氣が急くものだから、錠の下りてるのを知らねへで叩いて居た、ハテナ

と考へたが、錠は下りてるが家の中でグー〳〵恐ろしい鼾が聞ゑる、彌平次は節穴から覗いて見ると、引倒返ッて安兵衛さん、大鼾で寢て居る、

彌「何んだい是りやア外へ錠を下して寢て居なさるとは、何うしたんだい

とドン〳〵ドン〳〵、幾ら叩ても中々起きない、仕方がないから隣りを見ると、糊屋の婆アさん糊を煮て居る樣子、

彌「お婆アさんお早うございます、

婆「ハイお早うございます、

彌「隣りの安兵衛さんは能く寢て居りますねへ

婆「ハイ今朝明方に皈ッて來なすッて家へ入ッて寢て了ひなすッた、

彌、自分で締りをしたんですかい

婆「左樣ではありません、其處を開けて置くと人が來て五月蠅から錠を卸して置て呉れと頼まれたから、私が錠を卸して置て上げたのです

彌「さうですかい

婆「お前さんは青山の伯父さんの所からお使ひに來たのですね

彌「ハイ、青山の旦那の所から來たんだが、何分寐て居ちやア仕方がない、急にね目が覺めないやうだが、私しやア少し急の用があるから、ね目が覺めたら之れを上げてね呉んなさい

婆「ハイ〳〵宜うございます、本統に伯父さんと云ふね方も御親切で、此樣な飲んだくれの愚圖安さんの所へ……

彌「ね婆アさん、そんな事は云ふもんぢやアない

婆「なアに、だッて那んな酒好きのものはない、隣りに居るが、朝に晩に酔て居ないことはない、其代り少し錢でもあると誠に錢遣いの宜い人でねへ……夫れは置て往かッしやい、目が覺めたら上げるから

彌「夫れぢやア賴むよ、

婆「ね前さんは是から何處へね出でなさる、

彌「私やア是れから高田の馬場へ行くんだが、屹度ね願ひ申すよ

婆「エ、宜しうございます

と、此時彌平次が安兵衛を起して手紙を見せれば間違ひもなかッたが、氣が急く儘に糊賣婆アさんに賴んで飯ッて了ッた、婆アさんは煮た糊を持ッて朝の中に

婆「糊やひめ糊、糊やひめ糊

と、廻る所が極ッて居るから、是を廻ッて正午少し前に皈ッて來て飯を炊いて居ります、見るとまだグー〳〵鼾をかいて安兵衛寐て居るから

婆「本統に能く寐なさる人だ

と、獨言を云ッて居ると、ポン〳〵手を叩いて

安「婆アさんや、水を一杯持ッて來て呉れ

婆「ア、愚圖安さん起きたかい、今開けて上げるよ

安「ア、宜い心地に寐た、婆アさん水を呉れ

婆「大層寐なすッたちやアないか

安「ア、宜い心地に寐た、婆アさん水を呉れ

婆「さア、此處へ汲んで來たよ

安「是れは何うも難有い

婆「昨夜は何處へ往ッて飲んで來なすッた

安「ウム、昨夜他方へ往ッて充分に飲んで來た、近來此位ゐ飲んだことはないので、大層醉ッて了ッた、ア、宜い心地だ、又是から飲みに行くんだ

婆「飲みに行くんぢゐアない、れ前さんの所へ届け物がある

安「何んだ

婆「青山の伯父さんの所から何日も來る人が、手紙と包みを持て來ましたよ

安「ナニ何日も來る奴が包みと手紙を持ッて來たと

婆「さア〳〵御覽

安「許して呉れ〳〵もう見なくッても解ッて居る、其方へやッとけ

婆「だッて折角持ッて來たものだから見なさるが宜い

安「見ずとも知れて居る、伯父から酒の意見、叱言の手紙に相違

ない、見るのも面倒だ、止る時分には止める、是れが病ひだから止められない、酒を飲なければ一日も居ることの出來ない安兵衛だ、幾ら意見をしても無駄だ

婆「まア其樣な愚圖を云ッてないで、早く此手紙を見なさるが宜い

安「五月蠅いなア

婆「さア擴げて上げるから御覽、何が書いてあるか、大層立派な字で書いてある、オヤ〳〵〳〵此包みの中に羽織が入ッて居る

安「ア、左樣か、流石は伯父だ、もう三月となれば垢の目立つ時

分、大方着換もあるまいと羽織を寄越して呉れたか、ア、辱け
ない
婆「安兵衛さん、何を戴いて居るんだ
安「伯父が呉れた羽織か併し伯父の羽織は俺には着られない、伯
父は誠に小さい男でなア、夫でも着せやうと思ふから此通り呉
れたのだ、之を一ッ直して貰ッて着て歩行かうか、夫れも面倒
だな、寧そ置て飲んで了ッた方が宜いか、着て居る物は無くな
るとあるが、腹へ仕舞ッて置けば大丈夫だ
婆「又其様なことばかり云ッてる、さア早く手紙を御覧なせへ、

安「ア、夏蠅へな、何んだ以來酒を止めろ、酒を禁れば出入を吩
咐る、菅野六左衛門の跡目を相續させるといふのだろう、婆ア
さん見て呉れ、俺は見るのは面倒臭い
婆「私しに見ッたッて讀めやアしない、さア〳〵御覧
と、擴げて寐て居る安兵衛の顔の上へ被せたから、見るともなし
に安兵衛が右の手紙を讀下したが、是はと思ッて起上ッたる樣子
忽ち形を改めて手に取直し、改めて讀んで見ると、這は如何に
先頃村上との爭ひ鐵割の事件から、先方より付けられたる果し狀、
已むを得ず、今日高田の馬場へ出張し、運を天に任せ眞劍勝負

を致す、承はれば先方は大勢とのことゆへ、最早存命致すことはあるまい、我が亡き跡は宜しく心を改ため、菅野中山の家を興すは其方の役目、我が死んで其後は必らず酒を慎しみ、何れへなりとも奉公住をして呉れ、付いては遺物の此羽織、粗末の物なりと雖も紋所を大切にして呉れと認めてある、其書置同様の手紙を見了ッたが、安兵衛大いに驚ろいたと見へて

安「ヤア婆アさん

婆「何うしたえ

安「ア、遅かッた〳〵、南無三仕舞ッた、何故婆ア早く起さない

婆「幾ら起したッて起ないんぢやないか、まア何うしたんだい

安「イヤ、此處で何う斯う云ッて居る場合でない、是から高田の馬場へ行ッて事の様子を見届け、敵は助太刀大勢とあれば、某往ッて菅野六左衛門へ助勢致さねばならん、と立上て帯締直し、大小を手挾んだる時に、糊賣の婆ア大きに驚ろき

婆「まア安兵衛さん、何處へ行くのだ

安「何處へ行ッても搏はない、婆ア昨日まで飲續けで飯を食んか

ら腹が空つてる、イザといふ其時に空腹では働きが出來ぬ、先方は大勢といふことであるから、婆アさん飯を食はして呉れ

婆「飯と云ッて今炊いたばかりでアレを食べられては困る

安「イヤ困ッても大事ない、空腹では行かれん

と忽ち糊賣の婆アさんの家へ飛込んで、獨身者の婆アさん、小さな釜でお飯を今炊いて蒸して居る樣子

婆「夫れを食べられちやア困る

と、押止める婆アを引繰返して、安兵衛さん馬乘りに乘ッて釜の飯を食ふと思ッたが、何分熱いので食べられない、戸棚から丼を

出して飯を移し、塩を振掛けて水を打掛け、ザク〳〵ザク〳〵釜の飯を皆んな喰ッて了ッた

婆「まア安兵衛さん、酷いことをするぢやアないか、三日振の御飯を一度に喰べて了ッた

安「ア、婆アさん、腹が空ッた時も苦しいが、腹の滿いのも苦しいなア

婆「冗談ぢやない、苦しくなるまで喰はなくッても宜いぢやアないか

安「イヤ恨んで呉れるな、那の羽織は其方に預ける、必らず婆ア

さん、命があれば對面をする、事に據ッたら是が別れになるか
知れぬ、去らば
と云ッて安兵衛はバラ〳〵ッと其儘立出で、八丁堀川口町の家を
出で、高田の馬場を指して駈けて行く、驚ろいたのは町の者、近
所で知らない者はない赤鞘の安兵衛、
○「やア安兵衛が行くせ、何うしたんだらう駈けて行く
△「喧嘩を見付けたのか、何んだか飛んで往ッた
安兵衛が行ッた、愚圖安が行たと、云ふのを聞くと穴藏屋金八
も驚ろき

金「コレ安兵衛さんが何處へ行ッた
若「何だか知らねへが、親方跳足で飛んで行きました
金「フーム、何だか知らねへが其樣な容子ぢやア大方喧嘩でも
するんだらう、安兵衛に間違ひがあッちやア、八丁堀の外聞に
關はるから、跡を遂ッて助太刀をしろ
若「合點だ
と、穴藏屋の若い者、各自に鋸手斧を擔ぎ、ワーワッと行く、人
氣といふものは甚いもので、赤鞘の安兵衛が駈けて行く跡から、
穴藏屋の金八を始め、若い者が

若「退いた〳〵ヤーイ
と、掛聲をして飛んで行くから
○「何處へ行くんだ金八さん
金「何處へ行くんだか分らねへ、先が知れねへんだ
と、當所もなく飛んで行く、此方は安兵衛墓地に馳來ッたが、幾
于安兵衛でもさう息が續くものでない、所々井戸があるとは水を
飲み、又駈けて行く、其中にハヤ高田の馬場近く參りまするとゝ
向ふから來る人毎に、
甲「ア、氣の毒なことをした、身内も兄弟もない老人と見へま

す
乙「左樣でございます、私しは果し合だと云ふから面白いと思
て行ッて見たら、何だ今日のは果し合ぢやない、全であれぢや
ア弄り殺しだ
丙「アノ爺さんの働らいて居る後ろから往ッて斬付けた坊主は
何んでございませう
丁「彼れは何ですよ、六番町に道場を開いて居る、中津川友範と
いふ劍術遣ひだ
丙「へエー、劍術遣ひの癖に卑怯の事をする奴があればあるも

んだ、餘り爺さんが強いものだから尋常ぢやア往けないと思て、後ろへ廻ッて殺ッたんだと見へる

丁「那の時飛んで來た若黨だか何だか知らないが、忠義な男で忽ち七八人に斬れて了ッたが可愛想なことをした

丙「全体何處のお方でせう

丁「青山の右京樣の御家來だとか、浪人だとか云ふ菅野何とか云ふ人ださうです

と、彼方此方に來る者が悉とく其話をして行く樣子

安「ア、仕舞ッた、シテ見れば最う伯父は既に討死なしたるか、

去ながら當の相手はまだ退參せぬ樣子、少しも早く乘込んで立所ろに伯父の仇を討ち呉れん

と、高田の馬場へ乘込んで、其場に於て伯父の恨みを晴す安兵衛十三番斬の一件。

第三席

中山安兵衛は疾風の如くに飛んで參りまする、向ふから來る人の話しは何うやら伯父の六左衛門落命を致したるやうに聞へまする愈々心も心ならず馳せ行く時に、向ふから參りました一人の婦人に、思ひ懸けなく安兵衛が突當りました、平常なれば左樣なこと

はないが、斯ふ云ふ場合であるから、武藝者の安兵衛も聊か眼が眩みましたものか、其儘行かふとするを

女「モシ少々お待ちなさい

年齢四十余にもなる女安兵衛の袖を扣へました、氣が急が安兵衛

安「何んぞ御用で、如何なる御用があるか存せんが、斯る群集の中

女「イエ、手前娘に突當ッて何の御挨拶もなくお出なさる、百姓町人ならばお留め申しは致ませんが、失禮ながら御浪人でも刀差す者が、右樣な無禮をして挨拶もなくお出になるは、近頃其

意を得んとと存じます、相當の御挨拶があッて宜しいかと思ひます

安「是れは恐れ入りました、心急ぐ儘無禮を致た、何を隱さう某がしは、唯今高田の馬場に於て、大勢のものゝ爲めに落命を致した其者は、即ち拙者の伯父で未だ對手は其場を去ず居る樣子ゆへ、其場へ馳せ付け伯父の恨を晴し、仇討を致さうと存じ、心急く儘無禮を致して挨拶もいたしません、甚だ失禮を致した平に御免を蒙むる

と、安兵衛はまことに慢じない人でございまして、先方が女であ

るから振拂ッて行かうと云ふものではない、夫れへ蹲踞んで大地に指を支さ、頭を下げて詫入りました

女『是れは〳〵左様な急場のお望みのあることを顧みず、聊かたることに御足を之れにお止め申し、大きに失禮を致しました、扨は只今彼の所に於て、非業の落命をなされた方の仇討をなさる思召しか、早く左様仰せられ下されればお止申しは致さぬものを手前お詫を致します、さア〳〵少しも早くお出で下され

安『千萬辱けなふ存ずる、然らば御免

女『ア、暫らくお待ち下さい、れ見受け申せば縄襷を掛けてゐ

居での様子

安『左れば何んの支度をする暇もなく

女「縄襷といふは不縁喜のものと承知致します、暫時お待ちなさい、切めて襷を御用立申さう

安「夫れは千萬辱けない

と、彼の女暫らく娘の腰帶を見て居りましたが、又我身の腰を見て打首肯き、自分がさた腰帶を取りて安兵衛に渡し

女「粗末なものでございますが之を御用立申します、娘は未だ御覽の通り年若でございます、月の障りでもあるやうなれ疑ひが

あつては却てなりません、左様なものを差上げて、若もの事が
あッた時は、恩が仇といふとになりますから、もう手前は障
りも既にないものゆへ、何うぞ之れをた召し下され
安「ア、辱けない、此場に至ッて此賜物、難有く頂戴致す
と、いつたが、此が先きに辨じた堀弛彌兵衛殿の奥方とた娘御で
あります、早くも之を襷に掛け一禮述べて行過ぎる、見物のも
のは山のやうに立留ッて
○「オイ〳〵何うだ、何處の御新造だか浪人者が娘に突當ッたと
云ッて、談じた所は大したものだなア

十「又敵討ちに行くと云ふのを聞いて、自分の腰帶を取ッて、襷
にかけると云ッて出したのは豪氣だなア
△「何處の婆アさんだか知らねへが、結搆人ぢやアねへか
○「何うだい那の武士は何處の者だろう
△「ありやア赤鞘ぢやアねへか
○「さう〳〵赤鞘だ、愚頭安だ何うしたんだ
十「愚頭安め、飛んだことをやらかしやがッた
○「何んだか知らねへが、今伯父の敵を討つんだと云ッたせ
△「フーム、シテ見ると今斬られた爺さんは愚圖安の伯父さんか

此奴は面白い、もう一遍往ッて見やう

と、其儘見物は高田の馬場へ引返して參る、扨て安兵衛は高田の馬場へ來ッて見れば、幕の内に大勢のもの酒を飲んで居り、菅野六左衛門の死骸は其所に無雜作にも投出してある、其脇に若黨彌平次の死骸もある、樣子扨は全く伯父は討れ給ひしかと、バラ〳〵ッと其所へ駈寄りたることにして

安「エーッ伯父上、安兵衛遲刻致して甚だ恐れ入ります、必らず是へ參てはならん、跡々の事を賴むといふ御書面を顧りみず、此所へ罷越して見れば、早や大恩受けし伯父上は落命を遊され

尙ほ彌平次も是に來て伯父上と共に冥土のお供を致したか、此上は安兵衛大勢を對手にして腹切を仕つるの心底、若此所に落命を致さば冥土の途にお物語りを致す、魂魄此土を去ずんば此場に於て御見物あれ

と、伯父と彌平次との死骸に向ひ、生ける人に物言ふ如く、安兵衛サメ〳〵と物言ふ樣子、早くも見たる大勢

甲「やア來た〳〵〳〵、彼れは甥の安兵衛といふ奴だ、大方來るだらうと心得て居た所、案の條是れへ來た

と、一同の者動搖めいたる樣子、安兵衛其儘にして馬場の中央に

で進みまして、大音を揚げたることにして

安『やア〳〵村上庄左衛門、同じく三郎左衛門は何れにある、中津川友範は何れにあるや、此所に出で〻應對を致せ、菅野六左衛門の甥中山安兵衛武庸、此場に至ッて伯父の仇討ちを致すの心底、さア尋常に勝負に及べ、一人二人は面倒なり、一同是れに來るべし慶にして呉れん

と、腰に帶びたる關孫六兼光の鍛えたる三羽鶴と稱へたる業物、スラリッと引拔いたることにして、大勢を睨んで突立ッたる有様ソレと云ッて村上兄弟バラ〳〵ッと進み出で

庄『やア〳〵嗚呼がましき其一言、我に於て汝にこそ恨みあれ、イデ其義ならば相手をせん

と、庄左衛門立合ひに及ばんとする時に、松下與五右衛門、海野久四郎走り出で

與『村上氏のお手を煩はすには及ばず、我々彼を斬捨て〻御覽に入れる

と、松下、海野の兩名が右左りより斬ッて掛るを、間に立ッたる中山安兵衛

安『何を小癪な、イデ其義ならば汝等は冥途の魁さし呉れん

と、左りに立ッたる海野久四郎の眞向より空竹割に切下げたり、アッと云ッて海野が倒れる隙を覗ひ、松下與五衛門斬込んで來るをば体を換した安兵衛、ガッチリ受留め手許へ立入り、肩先深く斬下げたり、固より菅野六左衛門老人より手解きを受け、眞庭念流の達人樋口十郎左衛門の敎へに與ッたる腕前なれば、何かは以て堪るべき、兩人其場へ打倒れる、吉田與吾朋友の敵と斬込んで來る奴を、躍り懸ッて脳天から斬下げたれば是又夫れへ倒れる、内山軍藏、榊原太郎右衛門、同じく喜平次三人諸共に斬込んで來る奴を、物々しやと安兵衛が斬下したる一刀に、前に進んだ内山

の肩先より斬下げたり、アッと云ッて倒れる内に、片足上げて榊原喜平次を蹴返し、左りに立ッたる太郎右衛門の小鬢から肩へ掛けて斬付けたれば、アッと云ッて倒れる内に、喜平次は起上ッて逃んとなしたる後ろより、肩から脊に掛けて充分に打割ッたから是亦夫れに倒れました、之に代ッて島田良平、森村宇左衛門立出づるを、同じく難なく斬捨てました、此時に村上三郎左衛門躍り出で、勢ひ鋭く斬込んで來る奴を、ガッチリ受けた安兵衛手許へ立入り、三郎左衛門の脳天よりいたして四五寸斬下げたから、ウンと云ッて其處へ倒れる、兄の村上庄左衛門、もう仕方がござい

ません、必死となッて斬込でる來のを、チヤキン〳〵と刀を合せ暫時立合ッて居りましたが、實に火花を散すとは此事でございます、兎角して居る所へ

金『退いた〳〵〳〵愚圖安の助太刀が來たんだ

○『何んだ〳〵

と、云ふと八丁堀川口町の穴藏屋金八、若い者大勢を連れて得物〳〵を携さへ、此所へ乘込みました

金『ヤーイ安兵衛さん、大丈夫、私ち共が付いて居るから危なくなりやア出て上げるから確乎おやんなせへ

○『やア大變の助太刀が來た

と、見物はワア〳〵云ふ其中に、村上庄左衛門二太刀三太刀烈しく打込んで來る奴を、横に拂ッて安兵衛が一足進んで斬下げたれば、流石村上庄左衛門も、遂に肩失より袈裟掛に斬下げられ、バッタリ夫れへ倒れたり、もう是れ迄なりとあッて、中津川友範薩刀を揮ひながら打込んで來る奴を、体を換して安兵衛が一往一來一上一下、陰に閉ぢては陽に開き、暫時の間鬪ひしが、流石一流の指南を致す中津川友範、頻りに烈しく打合ッて居りましたが其中に安兵衛が横に拂ッた一刀で、友範の持ッたる薩刀の柄を夬

ばより斷切ッたり、南無三と云ッて友範が薙刀の柄を投捨てゝ腰に帶びたる一刀を引拔き、手許へ近く斬込んで來るを安兵衛右の腕を打落した、アッと云ッて下る所を、又飛び掛ッて左の腕を打落した、中津川友範南方の腕を打落されて、もう叶はないから逃出さうといふ所を、又もや飛び掛ッて眉間へ三寸許り斬下げた、未だ夫れでも駈けて行くから見物は驚ろいた

○『剛情な奴があれば、あるものだ、兩腕を斬られた上に眉間を彼樣に割られて居ながら、まだ逃げて行きやアがる

△『やア友範、何處へ行くんだ、最う斯うなッちやア仕方がない

釘拔屋の看板になるんだ

▲『此騒ぎに釘拔屋の看拔になるたアズウ〳〵しい奴だ

と、云ふ中から友範彼方此方を迂路々々して居る所へ、追掛け來ッて安兵衛が到頭首を刎ねました、幕を打ッたる傍への支度部屋の所へ來て見れば、最前菅野六左衛門に斬られ、此所に於て手當を致して居たる近藤忠作見付けられたから、ノッ〳〵這ッて逃げやうとする所を、與二ッに打割りました、最早相手も居らざる樣子ゆえ、ブル〳〵ッと血振ひをして、四邊の樣子を見たが只一同の者は聲を上げるばかり、然るに相手は確かに十三人と心得しに

十二人の死骸は其處にあるが、一人死骸が足りない、是れ迄に至ッて一人を遁すといふは殘念、何處に隱れて居るかと方方此方を尋ねまする、介添のものも多く來て居りましたが、是れは安兵衛が激しき働きをして居る中に、皆んな逃げて了いました、安兵衛此時血刀を提げたる儘、酒樽の前へ來ッて見ると、まだ八分目ばかり酒がある樣子、ニッコリ笑ッて柄杓を取ッてガブリ〳〵飲始めたのを見ると見物は

○「やア飲始めた〳〵、愚圖安が到頭酒を目付けた、餘まり飲んで醉らッちまはなけりやア宜い

と云ッてる中に、安兵衛今一人の敵手は何處へ逃げたかと尋ね廻す樣子、松山勘兵衛といふ男は至ッて臆病者で、安兵衛の烈しい働きを見たから、もう是れは迚も叶はんと思ひ、大勢が働らいて居る間に、支度部屋へ這入ッて脱捨てゝあッた羽織を取出し、襷を取ッて其上へ羽織を着し、手拭を被ッて見物の中へ潛り込んだが、場所もあらうに穴藏屋の金八の一群の居る間の所へ、ヌックリ面を出した

金「やア出やアがッた〳〵、安兵衛さん捕まへた此處に居る〳〵

と、突如取捕まへて引出したから

勘『イヤ拙者はさうではない

金『拙者も何もねへ遣ちまへし〳〵

と、大勢だから堪らん、ワッワッと高田の馬場の中央の所へ引出した、松山勘兵衛涙を流して

勘『私しは松山勘兵衛と申するもの、決して手向ひをした者ではどざいませんから、何うぞ勘兵衛してお呉んなさい

金『此野郎洒落るな

と、安兵衛夫れへ勘兵衛の利腕をシッカと押へ

安『一人でも助けて置ては恨みが晴れず、汝も是に來ッたるから

は、菅野六左衛門を一太刀たりとも恨んだものに相違ない、

勘『イヱ、全たく左様の覺へはどざいません、實は村上兄弟に頼まれ、中津川友範の門弟ゆへ、據ろなく是れへ參りましたが、菅野六左衛門に對して手向ひを致したものではどざいません、何うぞ御勘辨を願ひます、命斗りは一筋に御助け下されたく、誠に恐れ入りましたが命ばかりはタースケ給へ……

金『何んだ此中で天理王などを云ふにやア及ばねへ

と安兵衛は

安『全たく此奴も伯父に對して刃を向けたに相違ない、殊に若黨

彌平次の身体を此通り鎗のやうにしてあるからには、汝等の手に掛けたに相違ない、其方の腰の物に血が付いて居なければ助けてやる、若し血汐が付いて居れば助けることはならん

勘「何うか御勘辨を願ひます

○「先生〳〵是から見て居たら、其野郎菅野と云ふ人が殺られて仕舞ッて、若黨が飛んで出て二人とも殺られて了ふ、夫れまでは隠れて居たが、愈々二人共死んで了ふと、急に飛出して來やアがッて、突いたり蹴ッたり踏んだり、色々の事をしやがッた其奴を助けて置いちやア可けねへ〳〵

見物のものがワー〳〵と云ふから何うすることも出來ない、

衛は驚ろいた

勘「イヤ其様な事はない

といふ間もなく、安兵衛は彼の持ッたる一刀を引抜き見ると、充分血汐が乗ッて居る

安「扨は伯父へ對して手向ひをしたに相違ない

と、飛掛ッて到頭松山勘兵衛の胴体二ッに斬ッて了ッた、ワーワッと各々聲を揚て賞ざるものはない、夫より死骸を一ッ所へ集め伯父の死骸と、若黨彌平次の死骸を列べ、大地に手を付て安兵衛

安「伯父上、運に叶ッて安兵衛武庸参までのことを致しました、何卒御恨みを晴し下され、然れども斯く大勢を斬る上は手前も望みない身体、役人の手に掛り落命を致さんより、自殺をして伯父上の後より追掛け参らん、冥途に於て御物語り仕つると、安兵衛武庸既に腹を切らうとする所へ

御浪士暫らくお待ちあれと、聲を懸けたるものがある、抑も何者でございませうか、次回に詳しく申上げまする

第四席

安兵衛は切腹の覺悟を致したる所へ、暫らく〳〵と留めたるものがありますので、何者かと振返ッて見れば、法衣を着用致し一人の供を連れたる年齢六十ばかりの僧、足早に夫れへ出でました

安「唯今暫らくと仰せられたは貴僧でござるか

僧「去れば野僧は愛宕下萬年山青松寺の住職ト齢と申すもの、先刻からの樣子を此場に於て拜見を仕つりました、併し漫りに腹を召されるといふも、失禮ながら若氣の誤りかと心得る、斯く申するト齢が御身の成行を付けるでござらう、人を助けるは出家の役といふ諺もある通り、思ふに相手は無頼の浪人共と心得る其許は伯父何某の仇討を爲したりとあるからは、天晴名譽の

者、唯今より卜齡尊公の命はた守り申す、漫りに生害御無用
安『是れは流石に出家として能く仰せられ下されたれ、併しながら
御覽の通り、一人ならず十有餘人殺したる上からは、迚も生存
得べきにあらず、生中に死を留まり上の處刑を受けんより、
潔よく切腹仕つる
卜『イヤ〳〵暫らくお待ちあれ、死は一旦にして易く、却ッて後
に物笑ひになるといふこともござるから、先つ暫時れ扣へなさ
い
と、頻りに申して居ります所へ、早や町奉行所に之れを訴へたる

ものと見へ、其頃合南御月番渡邊日向守殿、御自身御出馬になり
ました、直ぐに檢死見届けお立合ひになりました、時に青松寺の
住職卜齡、是れなる中山安兵衛を預かるといふことにして、一時
青松寺へ引上げました、然る所天下の役人段々評議を致したる所
松平右京太夫家來菅野六左衛門、村上庄左衛門より果し狀を附け
られ、今日暇願ひを差出したる事相分りました、して見れば菅野
に罪は少しもなく、村上庄左衛門弟三郎左衛門始めとして、一流
指南を致すべき中津川友範、本來是れを誠しむべきものを、自分
が煽動をして果し合ひをさしたのは不届けの事、去れば右死骸に

於てはれ取捨に相成るべき所を、親戚の者或は門人より願ひ、死骸は引取ることになりまして、安兵衛は斬徳にてお搏ひなし、菅野六左衛門及び若黨彌平次の死骸は、安兵衛が引取り青松寺に於て萬事吊葬ひました、此事は終りましたが、御田の松平右京太夫殿よりは、右の次第にて天下に名を揚げたる中山安兵衛を以て、菅野六左衛門の跡を繼がせ、武藝指南役にれ抱へに相成る旨を仰せられましたが、安兵衛唯今御奉公をするは却ッて心苦しく思ひ望みでございませんと申して、其儘青松寺に暫らく厄介になッて居りました、所が此ト齢と云ふ人は、流石禪家の僧丈あッて、至ッて活潑の人でございまして、彼の節働らきの樣子を見て、悉とく安兵衛を賞めて居りまする所へ、前回にも申し上げましたが、鐵砲州輕子橋の淺野内匠頭家來留守居役、堀部彌兵衛の妻が嘱物を貸與へ、安兵衛の樣子を見て立皈ッて、右の次第々夫に物語りを致しました、時に彌兵衛は大いに喜こびまして……此堀部彌兵衛の妻が立皈ッての物語りは、前編に逃べて置きましたから、重復に渉りまするゆへ茲には述べません、何うぞ夫れとれ引合せを願ひます、けれども折角夫程の事を致しながら、浪人の名前住所を聞いて置かないといふので、大層彌兵衛が立腹を致しました、

是こそ娘かめの良人に相當の者だ、何うかして其浪人者を捜し出したいと、種々手を廻して尋ねました所が知れない。併し縁は何處にあるか知れないもので、淺野家の菩提所は全体萬年山青松寺でございます、後に御切腹の時萬年山青松寺へ其遺骸を持込んだ所が青松寺の番僧が其死骸を受取りません、寺社奉行から御沙汰のない内に變死人を受取ることは、不都合だと云ッて斷ッた、其處て内匠頭殿奥様御縁續き、松平紀頭様の御菩提所、高輪の泉岳寺へ納めましたものでございます、或る日彌兵衛青松寺へ參り卜齡和尚に面會をして、四方八方の話をして居る時に、立派の武士がチラ〳〵見へました

彌「時に御住寺

卜「ハイ

彌「彼れに居る武家体の者は何でござる

卜「イヤ何うも堀部老人何んでござると、お尋ねになるは沂其許にも似合はないことでござる

彌「ハヽア

卜「彼れは高田の馬場の大先生と人に云はれる中山安兵衛といふ人

彌「へエー、過日何か其伯父何某の仇討をして、十三人のものが殘らず斬ッて捨てた仁でござるか

ト「左樣、手前西新井近傍まで其當日用事があッて參り、丁度高田の馬場を通り掛らうと致すと、果し合といふので出家として左樣なものを見るも如何とは存じたが、通り掛ッた事ゆへ已むを得ず見て居ッたが、何うも堀部氏、豪いもので實に話のやうなものではない、眞劍勝負は……其時菅野六左衛門が落命をすると、若黨何某が來ッて、是は暫く間に斬られて了ひました所へ後れ馳せに參ッたは即ち彼の仁で、二言三言問答を致して

居る内に、忽ち大勢を斬ッて捨てたが、實に其の働といふものは老人に御覽に入れたかッた、野僧は武藝と云ふことは知らんが、劍術の名人とでも云ふか、飛鳥の如くにして目にも留らん位でござッた

彌「ハアーイヤ夫れは手前の悴で……

ト「堀部氏、相變らず御申戯を仰ッしやる、何んで尊公の那れが悴でござる

彌「甚だ恐れ入ッたが、御住職手前の悴に改めて面會を致したい實は其砌り斯う〳〵云ふことで、愚妻が腰帶を遣はしました

ト「ハヽア

彌「然に、其者の住所姓名を聞んといふ所から、大きに私も腹が立ッてな、家内を暫らく親戚の方へ預けて置いた位ゐだ、幸ひに當寺に居りまするならば、何うぞ是れへ呼び下さるやうに

ト「左様でござるか、然らば御紹介申すでござろう

と、是れから安兵衛を招く、安兵衛は青松寺へ來て、外に苦勞はないが、誠に難義なのは好な酒を飲む事が出來ん、左様かと云ッて青松寺を默ッて飛出す譯にも往かず、退屈で困ッて居る所へ招かれた

ト「さア此方へ……是へお在なのは淺野内匠殿家來御留守居役堀部彌兵衛といふ仁

安「ハイ

ト「是は中山安兵衛

彌「ハヽア左様か、始めて御面會仕つる、婿殿には何時も御[illegible]勝

安「婿殿……

彌「イヤ斯うばかりではお解りになるまい、始めからの話を致すが、拙者一人の娘に婿を迎へ度いと心得て居るが、扨ハヤ尋ね

て見るとないもので、男振りの好いのを捜すとか何んとか云ふならばありもしやうが、拙者は其様な事は嫌ひだ、唯武藝が出來て志ざしの忠なる者、又親に事へて孝なるもの、即ち忠孝全たふする所の武士を尋ねて居るが、何うも六ケ敷い、スルト拙者は其様なことは嫌ひだが、家内や娘が雑司ケ谷の鬼子母神を近頃信仰を致し、月の八日といふと必らず雑司ケ谷まで參る、付いて彼の三月八日も右様な事で罷り越し、其飯り途尊公れ忘れになッたか、高田の馬場へ參る途中、突當ッた女があッたのを……

安「如何にも心急きまする儘、御婦人に突當り、群集とは云ひながら……」

彌「イヤ〳〵其時咎めた婆アさんがあッたでござろう

安「ハイ如何にもた叱りを受けた、御老母と云ふ程でもござらんが……」

彌「イヤ那れが手前の家内だ、那の通り婆アになッたが若い時分には一寸奇麗でな

安「其様なことは仰しやるな

彌「イヤ却々理屈ッポイ方で咎めたさうだ

安「ハイ仁答めに預かりました

彌「所が尊公仇討をすると云ふことを聞いて、婆アも大きに驚ろいて、左様云ふ仁とは知らずに答め申して濟まんが、見受ると繩襷を掛けてお在だが、繩襷は不縁喜だから襷を御用立申さうと、娘のかめの腰帶をと思ッたが、ヒョッと月の障りでもあッてはならんと、自分の腰帶を取ッて尊公に進じたと云ふが、左様か

安「如何にも其通り、其後御返濟を致すべきの所……

彌 イヤ〳〵返さずとも宜い、夫れから貴公の働らきを見て婆アさんが皈ッて來て其話をした、ア、豪ひ人だ、腕前といひ伯父の仇討をしやうといふ精神は恐入ッた、何うか左様云ふものを婿にと思ッたが、尊公の名前住所を聞ずに參ッたさうで、私も大きに嘆

家へ預けて置いた位ゐだが、今日闘らず當寺に於て御面會を致すは、誠に喜こばしいことである、付ては如何でござらう此場に於ては約束は出來まいか、拙者方へ婿養子におなり下さる譯にはなるまいか、成らんならば成らんで宜しいが、武士は其返答を速やかにすべきもの、返事をするに相談するの考へて見るのと云ふことはない筈、若し御即答

が出來なければ、手前の方にも了簡がある

安「まア少しお待ち下さい、何うせ手前も妻を迎へなければならん身の上ゆえ、手前は宜しいが魯公の娘御の方で如何でござるか

彌「イヤ〳〵自分の娘を慢じるではないが、先づ普通の顔付だ、まだ年齢は若いが、併し魯公とは相應である、若し娘が氣に入らんければ婆アさんの方でも宜い

安 御串戯ばかり仰しやる

彌 住職魯公からも一ッお勸めを願ふ

ト、如何だ中山、御相談になッては……

安「夫程に仰せ下さるものならば、手前養子に參ッても差支へござらん

彌「夫れは千萬辱けない、然らば早速宅へ戻り此事を家内、娘にも申聞かせ、吉日を選んでお迎ひ申すことに致す

と、彌兵衛一人で喜こんで、スタ〳〵飯ッて了ッた、驚ろいたのは安兵衛

安「恐ろしひ爺さんだ

と云ッて居るのを下齢和尚が

ト『併し中山良い縁談と思ふ、中に堀部といふ人は誠忠無二の人で、殊更内匠頭殿のお覚へ目出度い人であるか、、是れは幸ひでござらう

と云ッて居る、此方は彌兵衛直ぐに立返ッて、右の話をしたものと見へ、富森助右衛門を以ッて改めて右の申込みをする、茲で上齢和尚富森助右衛門の二人が仲に立入ッて、結婚の式を擧げる中山安兵衛改めて堀部の養子になるの一條

第五席

堀部彌兵衛は幸ひ青松寺の住職と富森助右衛門の媒介に依ッて、

中山安兵衛を養子と致し、娘のかめと結婚の盃を擧げることになり、尤とも内匠頭へは願濟みの上でございます、長矩公もお喜こび遊ばして、諸藩共に高田の馬場に於て、即日伯父の仇討を致した安兵衛を何うぞ抱えたいと云ッて、其行衛を尋ねて居る内に、思ひ懸けなくも彌兵衛の養子となり、内匠頭の御家來となりましたから、其た喜こびは一方なりません、始めて目通り仰せ付けられた節に、大酒を致しましたことは、餘りにぐた〳〵しくなるから、茲には大略を講演致します、大抵の者は初めて君公の前へ出るなど、云へば、尚は慎しんで、飲む酒も飲まないと云ふやう

なものでございますが、安兵衛の如き英雄になれば、殿様の前だから遠慮をする、蔭だから勝手なことをすると云ふやうなことは決してございません、其潔白なることを内匠頭殿、強うお喜こび遊ばされた、尤も内匠頭長矩といふ方は、家來を使ふことに妙を得て居らッしやるお人でございます、御切腹の後、其志を相續して仇討を爲した四十余人は、皆な古參かといへば、左様でない、内匠頭殿御代になッてれ抱へになッたものも澤山ある、是が一致して身命を抛ッて主君の仇を報ゆると云ふは、是れ平素の使ひ方に依る所、此度安兵衛改めて堀部の養子になッたに付いて

堀部安兵衛武常と云ふことになり、此頃では御同席初め殿中に於て、折に觸れては其話しが出ると、大きに御自慢でございます、おかめ殿は良き婿を得られまして、喜悦此上もなく、琴瑟相和して、睦しく暮しましたが、不幸なるかな、元錄四年三月十四日殿中松の間に於て殿様浅野内匠頭が吉良上野介へ御刃傷の即日御切腹、れ家は改易御家來衆はチリバラ〳〵何れも浪人をいたす、れかめ殿の父上堀部[illegible]兵衛金丸は江戸兩國藥研堀で手習いの師匠を始める、奥方と娘御は是へ同居、婿の安兵衛武常は同じく江戸へ來ッて八百屋に身を扮して本所の吉良の屋敷の近所を徘徊して動

静を伺ふ、後には安兵衛薬賣にも扮ッた、其内に天道順環して、大石内藏之助を始め四十六人、吉良邸へ討入ッて、比類なき働きをして、首尾能く吉良の首を取つて、一同泉岳寺へ引上げる、此時堀部彌兵衛金丸は七十有餘の老人で、婿の安兵衛の肩へつかまッて往つたのが、大層見物の感情を動かしたといふことであります、さて四十七人は四家の諸侯へお預けになッて、各々切腹をする、遺骸は泉岳寺へ葬ることになつた、此時安兵衛の妻れかめどのは、間もなく母上も沒くられて、今は一人の身体となられたから、剃髪して尼となり、妙海と名乘ッて、泉岳寺四十七士の墓側へ庵を結び、夫安兵衛の墓・緣につながる大石始め四十有餘人の墓をば掃ッて、貞操堅固に世を終ッたといふことであります、又淺野内匠頭様の奥方は、大層な美人であッて、此れ方を吉良家で嫁に欲しいといッたのを、淺野家で貰受けて了はれたから、吉良が淺野に對して意恨を含んだのは、夫等の邊もあるとの事、其奥方も御家滅却の後は、麻布南部坂のお里方へ引取しましたが、此も剃髪して尼となり、瑤泉院と名乘られて、時々泉岳寺へ御參詣になり、妙海尼と御對面になッた、妙海も數々麻布南部坂の瑤泉院様へ上ッて、舊雨を語ッて、四つの袖を濡はしたこともあると

のこと、此瑤泉院様は沒なられて、内匠頭様の墓側へ葬られまして、方今以て其墓が存して居ります、又妙海尼墓も泉岳寺に遺ッて居りまするが、妙海生前に一本の梅樹を庵側へ植えましたが、此梅は『妙海手植の梅』といふ標杭が建ッて、矢張泉岳寺義士の遺跡の一つとして、妙海の貞節と共に、千載の下まで芳しき香を傳へ居りまする次第でございまする、堀部安兵衛の傳記は世間に有觸れて居りまするから、今回は高田の馬場を主とし貞婦良夫を得るといふ、武家に生まれただけあッて、女姓ながらも武士氣質を貫きましたといふ講設でございまする。

《完》

新落語大會　終

明治四十三年十一月八日印刷
明治四十三年十一月十日發行

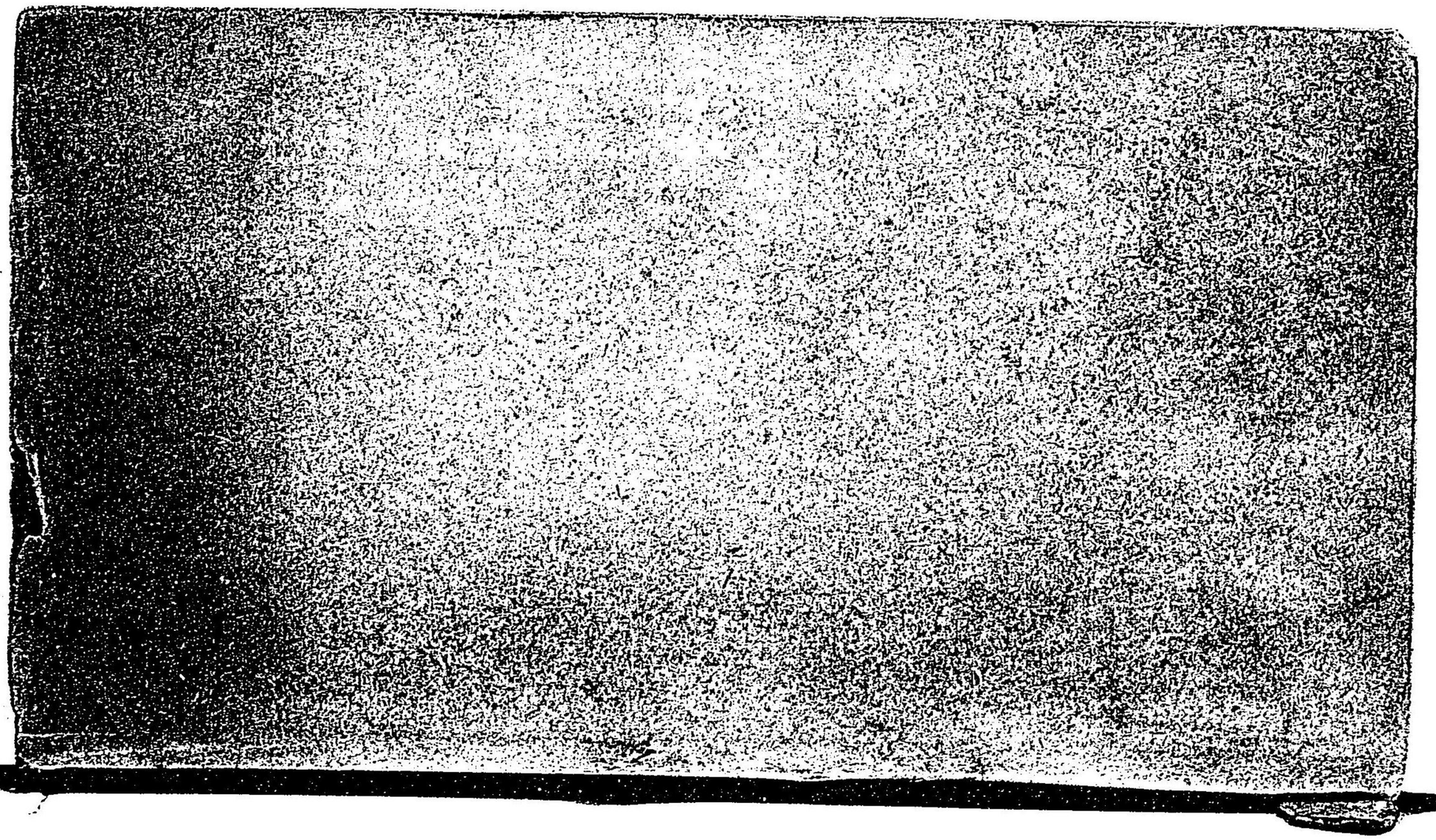
定價金貳拾五錢
郵稅金四錢

著者　翠雨小史

東京市淺草區新福井町一番地
發行者　山崎曉三郎

東京市淺草區西鳥越町二番地
印刷兼發行者　伊藤勝次郎

發行所　東京市淺草區新福井町　國華堂書店

不許複製
新落語大會

261
682